

平成 15 年 5 月 1 日

《パーキンソン病とは？》

脳の中にある、ドパミンという運動を調節している神経伝達物質が不足して手足が震え、筋肉の動きが固くなって動作が遅くなります。ほとんどの場合（患者の約 60%）、50～60 歳代の高齢で発症します。

～病気が起こるしくみ～

脳には、「黒質」という神経細胞の集まりがあり、ここで作られるドパミンという神経伝達物質が運動の調節に重要な役割を果たしています。パーキンソン病では、この黒質の神経細胞が減ることでドパミンが十分作られなくなり、その結果、身体の動きが鈍くなるなど思うように動けなくなります。

《どんな症状が出るの？》

パーキンソン病に特徴的な症状として...

手足のふるえ（振戦）

- ・安静時に自然に起こり、意識的に手足を動かそうとすると、むしろ軽くなります。一般に左右どちらかの手足から始まり、次第に反対側に広がっていきます。
- ・指先で丸薬を丸めるような動きや、紙幣を数えるような動きが特徴的です。

筋肉のこわばり（筋固縮）

- ・筋肉が硬くなるため、患者さんの関節を伸ばそうとすると、カクンカクンという筋肉の抵抗を感じます。これは、歯車が噛み合っただけで回転する時の感じに似ていることから、「歯車現象」と呼ばれています。
- ・シャツのボタンをかけた時、靴ひもを結ぶような日常動作が難しくなります。

動きが鈍い（無動）

- ・何かをやろうとしても、動き出すまでに時間がかかり、動作全体も遅くなります。
- ・顔の表情がまるで仮面をかぶったようにとても乏しくなったり、字を書くとだんだん小さくなったりします。
- ・歩行開始時、始めの第一歩が踏み出せません。（すくみ足）

姿勢が悪くなり、倒れやすい（姿勢保持障害）

- ・立っている時に、前かがみでひじと膝を軽く曲げた姿勢になります。
- ・少し押されただけで前方、後方、側方に倒れやすくなります。
- ・歩行は小刻みで早足となり、急に止まったり、方向を変えることができず、前方に突進してしまうこともあります。

《治療するには？》

パーキンソン病では、ドパミン（DA）と運動機能を調節するアセチルコリン（ACh）のバランスが変化してしまっているため、弱まったドパミンの作用を強めてあげるか、アセチルコリンの作用を弱めてあげて、正常なバランスのとれた状態に戻すことによって行います。

ドパミン補充薬（L - ドパ製剤）（ドパールなど）：脳内でドパミンに変わる L - ドパ製剤を服用することで、不足しているドパミンを補います。

ドパミン受容体刺激薬（パーロデル、ドミンなど）：脳内のドパミンを受け取る場所に結合して、ドパミンの働きを補います。

B 型モノアミン酸化酵素（MAO - B）阻害薬（エフピーなど）：MAO - B の作用の阻害により、ドパミンの代謝を抑制してその作用を持続させ、併せて活性酵素の生成を抑えて黒質神経細胞に保護的に働きます。

ドパミン放出促進薬（シンメトレルなど）：脳内に残存するドパミンに作用して分泌を促します。

抗コリン薬（アーテン、アキネトンなど）：アセチルコリン系の働きを抑え、ふるえや筋固縮に改善効果があります。

ノルアドレナリン補充薬（ドプスなど）：症状が進んだ段階で減少するノルアドレナリンを補充します。ノルアドレナリンが減少すると、すくみ足などの症状が現れることがあります。

《日常生活で注意してほしいこと》

1，薬の量を守る

薬の量やのみ方は医師の指示に従ってください。状態がよいからといって、勝手に薬の量を減らしたり、服用を中止したりすると、症状が悪化することがあります。

2，転倒事故、骨折の予防

パーキンソン病には、体のバランスがとりにくく歩行がスムーズに運ばないという特徴があります。前方に倒れて顔面にけがをしたり、転んだ際に骨折をしたりする場合があります。歩行先にイスなどの障害物を取り除き、通路を広くとるなど転倒事故を防止しましょう。

3，毎日、散歩をする

手足を大きく振って歩くことを日課にしましょう。